

マンティネイアのディオティマから「愛の哲学」を教えられたと語り、彼女のことを聡明な女性で、哲学者であり、巫女でもあると説明する。また、「アテネの疫病〔紀元前四三〇年に流行し、多くの死病者を出したが、なんの病者も出たか不明〕」を予言し、生け贖を捧げる儀式を行なうよう市民に命じたおかげで、疫病の蔓延を遅らせることができたとも言っている。このように、ディオティマという人物は、予言や予知と結びつけて語られることが多い。ソクラテスはこれを彼女のすぐれた知性の証明として紹介し、またある説によれば、彼女の奥深い智慧に比べて、ほかの演説者たちの知識が浅薄なことを知らしめてもいるという。

ソクラテスはディオティマから偉大な智慧を学んだことを思い出す。また若かったころ、ディオティマから、のちに「ソクラテスの問答法」として知られるやりかたで議論に誘われたというのだ。これは、相手の考えかたやものの定義について次々と質問を投げかけ、別の見解へと導く対話術のことである。そうすると、ソクラテスが哲学にもたらした偉大な貢献のひとつ「ソクラテスの問答法」は、もしかしたらディオティマが教えたものだったのかもしれない。

ソクラテスは若き学生だったころにディオティマと交わした会話を紹介していく。彼女から教えられた「美」の理論をかいつまんで説明し、ディオティマのいう梯子（はしご）つまり「愛の梯子」について解説する。ここはふたりの対話のなかでもっともよく知られている部分だ。ディオティマのいう梯子とは、魅力的な肉体への欲望が梯子のいちばん下にあり、そ

こから「美のアイデア」を認識する最上段へ昇っていくということだ。愛の梯子には六つの段階がある。ひとつ目は、だれかひとりの肉体への愛。ふたつ目は、すべての美しい肉体への愛。三つ目は、魂が持つ美への愛。四つ目は美しい社会活動への愛、五つ目は知識全般への愛。そして最後に「美」そのものへの愛に達し、ディオティマはこれを「美の大海原を観察する」と表現している。「美」そのものを認識することで、真の徳がもたらされるのだ。ディオティマは続けてこう語る。「美」そのものへの愛を知った者は「智慧を求め果てしない愛のなかで、公正で高潔な言葉や思想をふんだんに生み出す。そうして、その人はより強く成長していき、ついに知識をひとつ手に入れる。それはあらゆる場所に存在する美の知識なのだ」。したがって、「美」を認識するには、単なる外見を超えた抽象的な「美のアイデア」を知らなければならない。

この議論は、プラトンの有名な「アイデア」の理論と深く関わっている。プラトンは多くの対話を通して、「アイデア」とはたえず変わりゆく現象界における、ものごとの非物質的な本来のありかただと主張した。したがって、わたしたちは現象界のなかで事物の知識を得ることはできない、とプラトンは言う。なぜなら、それはアイデアという永遠の領域にあるものの模倣にすぎないからだ。そのため、単なる意見ではなく知識にまで到達するには、知覚と影の世界から離れ、アイデアの世界へ向かわなければならず、なかでもっとも重要なのが「善のアイデア」である。「善のアイデア」が「美」や「正義」などほかのアイデアと同



もうひとつの思想史入門

女王たち

THE PHILOSOPHER QUEENS

哲学の



晶文社



レベッカ・バクストン・リサ・ホワイティング 編
向井和美 訳

The Lives and Legacies of
Philosophy's
Unsung Women

Edited by
Rebecca Buxton and Lisa Whiting